

拝啓

我が家に庭のスイトピーや桔梗の花が終り、初夏の頃となりまいた。お元気でお過ごしのことと思います。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。第 62 号をお送り致します。

今月から、金田福一先生の「日々の糧 365 日」からの引用をお送りします。金田先生の文章は、二十年ぐらい前、体調がすぐれなかったころ、「生きよ」という題の小さい本を読んで以来、ずっと読んでおりました。金田先生は、「内住のキリスト」と言うことをよく言われます。その頃は、キリストに自分のうちに住んで頂くとは、どういうことだろうと、金田先生に直接聞きたい思いでした。今なら祈りを続けることによって、それも可能になると思いますし、キリスト教は、祈りによって人を小キリストに作りかえる宗教のように思ったりします。

今月号の冒頭に載せた「どこまでも、主は共にいてくださる」という文章は、「霊想の糧」にはさんであった雑誌「いのちのことば」からの文章ですが、金田先生の自伝的文章として、載せることにしました。

南原繁、矢内原忠雄、新渡戸稲造、内村鑑三の 4 先生のお墓が多磨霊園にあって、それぞれ歩いて 5 分くらいのところにあります。南原先生のご命日は、5 月 19 日ですので、その周辺の日曜日の午後、4 先生のお墓参りをこの 4 年続けています。今年も南原研究会のメンバー 3 人で、行きました。それぞれの先生のお墓の前で、先生方のお好きであった讃美歌を歌い、誰かが感話を述べ、祈るという形で、墓参いたしました。

今年は、医師の石川信克さんと、南原研究会の新入会員の西野宏明さんと私の 3 人でした。石川信克さんは、結核研究所の所長で、先月は、1 月に 3 回もヨーロッパに出張したというくらい国際的に活躍している超多忙な方です。ネパールで医療伝道された岩村昇先生に感化を受け、バングラデッシュなど東南アジアの医療伝道に活躍された著名な医者です。石川医師は、私の親友の阿部達雄君の桐生高校の一年後輩で、阿部君が亡くなったときの主治医でもありました。阿部君が取り持ってくれた縁で、私は石川先生を南原研究会に誘い、親しくさせて頂いています。お墓参りの感話や居酒屋で直らいでの話で、小学生のころシュバイツァーに感動したことから医師を志したこと、岩村昇先生にあったときの話、バングラデッシュで、単に援助をするのではなく、自主性を育てる人づくりから始めたことなどを聞きました。5 月のさわやかな風が吹き、高々とそびえる大木の日陰の元で、本当に印象に残る墓参の半日でした。

最近初めて、テニスの「イン・メモリアル」(岩波文庫)という長詩を読ん

でいました。テニスン（1809-1892）はイギリスの有名な詩人で、「イン・メモリアル」は、学生時代の親友で、卒業の翌年に急逝したアーサー・ハラムという親友の追憶の詩ですが、テニスンがその後何十年も、ことあるたびに、ハラムのことを思いだし、追憶する詩でした。

イン・メモリアルの冒頭は、

「神の強い御子、永遠の愛よ、

私たちはあなたのお顔は見たことがないが、

信仰で、ただ信仰で、あなたにすぎる、

証しは立たぬながらも、ひたすらに祈りつつ。」

と言うことばで始まります。矢内原先生の本で読んだ、

「神の強き子、不朽の愛よ Strong Son of God, Immortal Love」と言う言葉は、ここからきていたのです。

私も、阿部達雄君のことを、一日も忘れたことがありません、毎日の祈りの中で、彼に語りかけ、出来事を報告し、援助を頼みます。私にとって、阿部達雄君人は小西先生に引き合わせてくれた大恩人ですし、たぐいまれな魂の純粹な心の優しい人でした。人があれほど純粹になれるかと思うような人でした。「あなたが、これらの小さき人にしたのは私にしたのだ」というマタイ伝（25・34 - 40）のイエスの言葉がぴったりする、人々にやさしい言葉で語りかけ、ごく自然に施しをする実に心の優しい人でした。

その阿部達雄君の高校時代の一年後輩で、主治医だった石川医師と一緒に、阿部君の思い出を語りながらの墓参でしたから、特に心に残りました。

目下、6月4日（月）に開く第4回新渡戸・南原賞受賞式の準備を一生懸命やっています。与えられた仕事に全力を尽くしてまいりたいと思います。

暑さに向かうころですので、どうぞ御身体御自愛の程、祈りもうしあげます。

平成 19 年 5 月 29 日

山口周三

エンカウターの読者各位